

## 揺れる

深海 亮・著

三巻、本編終了後のお話です。

雪花は額を手の甲で強く拭い、不機嫌そうに眉を顰めていた。覆いかぶさっていた志輝の体が、急に重みを増した。雪花の上でいきなり眠りこけたからだ。女も嫉妬する綺麗なご尊顔はうっすらと赤みを帯びている。

(本当に迷惑な奴だな、この酔っ払いめ)

勝手に押し倒し、勝手に額に口づけした挙げ句、勝手に一人眠りに落ちるとは。雪花は志輝を力任せに引き剥がすと、盛大に溜め息をついた。気づいてしまった故に認めたくない感情を吐き出すように。

うつ伏せで眠る志輝を睨んだ後、雪花は恥ずかしさと腹立たしい気持ちを込め、指で志輝の額を弾いてやった。酔っ払いは若干眉を顰めたが起きる気配はない。腹が立つのもう一発弾いてから、雪花は鼻を鳴らして寝台から離れた。卓の上に置かれた酒瓶は空だが、酒瓢箪の中身は十分に残っている。

(好き勝手したのはそっちだ。これくらい安いもんだろ)

雪花は可愛げのない笑みを浮かべると、酒を頂戴することにした。立ったまま酒を飲みつつ、寝台に突っ伏す志輝に恨みがましい視線を送る。そして改めて考える。

どうして選りによってこいつなんだ、と。一番苦手な奴相手に、何故こんな感情を覚えなければならない。他に考えるべきことはたくさんあるのに、妙に心がざわつき、意識が逸れる。自身の中にある感情に気づいても、どうにも納得いかない雪花である。

ぐい、と酒を飲み、雪花は檻に入れられた獣のようにうろうろする。

広い室内には書棚が置かれ、大量の書物が積まれている。志輝の趣味なのだろうか。まあ好き好んで街を出歩く性格でもなさそうだし、奴らしいといえば奴らしいか。

すると書物の中に、江瑠紗語で書かれたものが交じっていることに気がついた。それだけでない、新聞も置かれている。

志輝の姉——珠華の夫は、江瑠紗の人間だと聞いている。異国のものを手に入れるのに不自由はないだろう。雪花は新聞を手を取った。

「Is it the end of power?」

新聞の大きな見出し——“権力の終焉か？”

雪花は長い旅の道中で、風牙から江瑠紗語を教わり、江瑠紗にしばらくの間滞在した。風牙のように流暢な会話はできないが、簡単な会話くらいならば可能だ。所々読めないが、皇帝、属領、翳り、貴族、腐敗、牢獄、襲撃、皇女——単語を拾っていけばある程度予想はできる。

(皇女っていえば、確かネイサンの護衛対象だな)

雪花は文面に目を落としながら、江瑠紗で出会った優しい一家を思い出した。

仲の良い夫婦、ネイサンとジュリア。そして彼らの可愛い娘、ステラ。悲しいことにジュリアは持病で亡くなったと訃報を受けたが、彼女はとても明るく、太陽のような女性だった。

(そういえば、ジュリアがなんか言ってたな)

何の話だっけ、と雪花は首を捻る。確か朝食の席で、風牙とネイサンが何か言い争いをしていたんだ。そもそも何で言い争いになったんだっけ。ああそうだ。男性の好みをジュリアに問われ、風牙と正反対の特徴を告げたら風牙が怒って、雪花に同調したネイサンと言い争いを始めたんだ。そうしたらジュリアが笑いながら雪花に——。

『全く好みじゃなくても、なんだか惹かれちゃう人が出てくるから。気づいたら、恋に落ちてるのよ』

雪花は愕然とした。ジュリアが口にした台詞が、今まさに、雪花の身に起きている。雪花は奇妙な呻き声をあげ、その場にしゃがみ込んだ。

(なんでこんな時に思い出したんだ)

せっかく落ち着いてきたのに、また顔に熱が集まっていく。雪花は頭を振って酒を全て呷り、口元を手で拭った。空になった酒瓢箪を卓に叩きつけるように置くと、むしゃくしゃした気持ちのまま部屋を出ようとしたが。

「……くそ」

布団も被らず突っ伏している志輝を振り返り、雪花は渋々ながら布団を被せてやった。やや乱暴な手つきになってしまったが、このくらい許されるだろう。人の気持ちを知らず、気持ちよさそうに眠る志輝を雪花は見下ろす。

この気持ちを認めたとして、その先に何があるというのか。身分も違えば住む環境も違う。この男は良くとも、周りは良しとしないだろう。それに、だ。誰かと添い遂げる将来など、自分には考えられない。

雪花は睫毛を伏せると、燭台の灯を吹き消した。

今はまだ、考えない。やるべきことが目の前にある。考えるのは、全てが終わった後でいい。この国に戻って来られる保証もないのだから。

けれどもし、再びこの地を踏むことができたその時は——。

(なんて返事をするのかな。その時、自分は)

雪花は踵を返し、部屋の扉を静かに閉めた。